

「とりかへばや物語」と後代文学

— 柳亭種彦作「奴の小まん」との比較 —

鈴木弘道

「とりかへばや物語」は、男が女に、女が男に取り替へられるといふ特異な趣向の下に作られた鎌倉初期の作品と思はれるもので、これの影響感化を受けた注目すべき後代文学作品としては、中世小説「ちごいま」(市古貞次氏著「未刊中世小説解題」一三〇頁・古典文庫「未刊中世小説」三三三頁、及び「平安文学研究」第三輯所載、拙稿「とりかへばや物語」と後代文学「ちごいま」との関係」参照)及び「考古画譜」に記された「新蔵人物語」(横山重・巨橋頼三両氏共編「物語草子目錄前篇」所収、平出鏗二郎氏著「近古小説解題」三五六・三五七頁参照)などが挙げられるが、ここに考察しようとする江戸時代の一作品、柳亭種彦の読本「奇話奴の小まん」も亦この種のものとしては見逃すことの出来ないものである。

「」の引用文及び頁数は本書のそれである。
と記してゐる。

以下、両物語につきその変装を中心として比較考察し、以て両者の関係を明らかにしようと思ふ。

二

「奴の小まん」に於ける小まん・しのぶの二人の変装は、「とりかへばや物語」で若君(男)が幼少の頃から女の子らしい性格態度に扱つて姫君と呼称され、姫君(女)がその男らしい性格態度から相手の若君となるといふやうな、同時にお互が取り替るといふ非現実性を帯びた変装とは些かその趣を異にしてをり、従つて、物語の構想に於ても「とりかへばや物語」の如くそのお互の変装が物語の根本的要素となつて、そこから種々の恋愛事件が展開するといふやうな類魔的傾向は見られず、寧ろ様々の事件の推移発展の中に、一趣向として変装や恋愛が描かれたものであるといふことが出来る。即ち、「とりかへばや物語」では、変装は物語の根本的要素でその中に於てそれが更に恋愛事件へと発展し、「奴の小まん」では、変装や恋愛は物語の部分的要素となつてゐる点、両物語等しく恋愛と男女の変装を取扱ひながらも、そこに差異が認められるのである。

さて、かくの如き地位を占めた変装の性格は両物語に於ていかなる類似点が見られるであらうか。

とりかへばや物語と後代文学

この「奴の小まん」は前後二編に分たれ、前編では鎌倉の武士宗景の側室唐衣(後、宗景の家臣入江安濃次郎の側室)を中心にその非道ぶりを描き、後編ではその後日譚として唐衣の娘小まんと安濃次郎の息子しのぶを中心とし、前後相通じて復讐を主題としたものであるが、一言にして云へば同一作品中で女性の小まんが男装をなし、男性のしのぶが女装をするといふ点に於て「とりかへばや物語」と似通ふだけであつて、種彦自身もそれを意識して書いたらしく、後編の例言の最初にも、

此書男女のすがた異なること。とりかへばや物がたりに似たれば新とりかへばや物語と名づくべしといひしを。兒女の目しるきため。仮名にて奴の小まんと記さばやと。書房のことばにまかせかくなしぬこは目ぐすりひさくおぼろ看板に眉目を画くに似たり(帝國文庫第四十八編「俠客伝全集」所収本七二八頁。以下「奴の小ま

先づ「とりかへばや物語」に於ける美貌の若君(男)の幼少の頃の性質は次のやうに示されてゐる。

若君は、あさましう物恥をのみし給ひて、女房などにだに少し御前遠きには見え給ふ事もなく、父の殿をも恥しくのみ思して、やうく御書ならはし、さるべき事ども教へ聞え給へど、思しもかはず、唯いと恥しとのみ思して、御帳の内にもうづもれ入りつゝ、絵書き雛あそび、貝おほひなどし給ふを、殿はいとあさましき事に思し宣はせて、常にさいなみたまへば、はては涙をさへこぼしてあさましうつゝ、まじとのみ思しつゝ、唯母上御乳母、さらぬは、無下にちひさき童などにぞ見え給ふ。さらぬ女房などの御前に参れば、御几帳にまつはれて、恥しういみじとのみ思したるを、(校註日本文学大系本四六八頁。以下「とりかへばや物語」の引用文及び頁数は本書のそれである)。

又、同じく美貌の姫君(女)については、

姫君は、今よりいと不詳なくて、をさく内にも物し給はず、外にのみつとおはして、若き男子ども童女などと、鞆小弓などをのみ遊び給ふ。御出で居にも人々参りて、文作り、笛吹き、歌うたひなどするにも走り出で給ひて、諸共に、人も教へ聞えぬ琴笛の音も、いみじう吹きたて、弾き鳴らし給ふ。物うち論じ、歌うたひなどしたまふを、(中略)人々の参るには、殿の御装束などし給ふ程、まづ走り出で給ひて、かく馴れ遊び給へば、なかくえ制し聞え給はねば、(四六八頁)

とあるが、これに拠ると、要するに若君(男)は内気で羞

恥心強く女性のする遊戯を翫ばれるなど、すべて女性的性質であり、反対に姫君(女)は社交的・活動的で、すべて男性的性質であつた。而して、かかる変態的性質が動機となつて父殿をして「とりかへばや」と歎きさせ(四六九頁)、遂に若君(男)・姫君(女)は同時に又無意識的に夫々女装・男装させられて、姫君(男)・若君(女)と申し上げられるやうになつたのである(四七〇頁)。

茲に於て、この物語の変装の性格は時間的には同時であり、又お互の個性から出た謂はば運命といふ不可抗力に拠るもので、決して本人の意志に依つて招かれたものではなく、而も、

〔父権大納言ノ〕北の方二所ものし給ふ。一人は源宰相と聞えしが、御女に物し給ふ。御志はいとしも優れねど、人より前に見そめ給ひてしかば、おろかならず思ひ聞え給ふに、いと世になく、玉ひかる男君さへ生れ給ひにしかば、(中略)今一所は藤中納言と聞えしが、御女に物し給ふ。御腹にも、姫君のいと美しげなるうまれ給ひしかば、

(四六七頁。圈点筆者)

とあるから、当然男君について姫君の御誕生があつたわけであるから、この二人は本来「兄妹」の關係にあつて(岡本保孝の「取替早物語考証」の年立には「姉弟」の關係にあるとしてその年齢が計算されてゐるが、その誤謬であることは明白である)、それが個別的ではなく、協同的・對蹠的に取り替つての変装といふ頗るこみ入つたところに変装に於ける一特色を見出すこと

りかへばや物語」とは人物の点に於て著しく類似してゐるといふことが出来るであらう。

この小まん(女)がどのやうな性質であつたかにつき、物語中に初めて現はれるのはその十九歳の時で、

「小まんハ」荆棘のうちにおひたつといへどもあでなるすがたは花にもまさり才もすぐれそのうへなみ／＼の男のおよびがたき力量あれども露ほこれるけしきなく只母がみちならぬおこないをものうく思ひいまだに二八にみたざるころより数／＼諷言をもちふれどもしたひに悪行つり(前編「五、美少年竊に母を諷む」の条、七一四頁)

とある如く女性にして而も男勝りであつたことが知られる。又、後に小まん(女)が、旅人を襲ふ盜賊の女首領となつた母唐衣を諷めるため、旅人を装ひ母の相手となつて、自分の持つてゐた尺八でその「佩刀をうちおとしその手をとらへねぢあげ」たり、「母さまかくのごとき強氣のしれものいであひ給はゞそのときいかにしてしとめ給ふ」と笑つて云つたりする(前編「五、美少年竊に母を諷む」の条、七一六頁)が、それ程の豪傑振りをも小まん(女)は發揮することが出来たし、又、しのぶ(男)の母横雲の仇庄兵衛を尋ねて難波へ赴いた際にも、「いつとなく喧嘩かふ町奴の異名をとつて奴の小まんといひならはし」(後編「四、孝子難波に仇を報ふ」の条、七四四頁)遂に仇を報いるなど頗る豪勇の

が出来てあらう。

次に「奴の小まん」について考へて見るに、小まん(女)の男装もしのぶ(男)の女装も、互に二人の間に取り替つての変装をしたのではなく、何れも一般的な男性・女性に変装したのであり、又それらは夫々異なつた環境・理由の下に行はれてゐる。

左衛門尉宗景は、家来入江安濃次郎と自分の側室唐衣とが情交關係にあることを知り、直ちに唐衣を殺害せんとした。しかしその時彼女は懷妊の身であつたので、もし生れた子が男子であるならば宗景の世嗣とするが、女子であれば安濃次郎の子として与へる、といふ条件で彼女を安濃次郎の妻とさせた。かくして生れ落ちたのが小まん、女児であつたため宗景の命令通り安濃次郎の実娘として育てられることになつたのであるが、実はその小まんは主君宗景の胤なのであつた(前編「二、雨夜に計て私夫を斬る」の条、六九九・七〇〇頁)。その後、安濃次郎は横雲といふ女を側室とし、九月十三日の夜生れたのが男児雲井であり(前編「三、侍女暗に茶毒を知る」の条、七〇七頁)、後に名をしのぶと改める(後編「一、行童副を割て女を顕す」の条、七三〇頁)。従つて、この二人の關係は嚴密に謂へば他人同志で、血統は統いてゐないが外面上異腹の「姉弟」の關係にあり、それが個人別に一般的な男装・女装をするのであるから、「と

持主であつた。

右のやうな性格の小まん(女)が男装したといふことは、尠くとも彼女の男性的性質が一つの原因をなしてゐたかも知れぬが、それは決して直接的動機ではない。小まん(女)は母唐衣が盜賊の女首領として「日々わるだくみをめぐらす」のを「見るにしのびず」(前編「五、美少年竊に母を諷む」の条、七一四頁)、遂に誠心の籠つた諷言を吐いたが、それに対して快く思はぬ唐衣は「此後そのこといひ出ばわが子とてうちすておくべきかとこぶしをあげてうたんとする」有様であり、而も同じ盜賊仲間金兵衛・九助が「小まん女郎にはあまりとやおとなしやかなるゆへ首領の心にいらざ此後はちとおとこぐるひにてもなし給へ」と笑ふに至つて「小まんも今はあきれはて」、結局「美少年すがたにさまをかへ淨敏寺といへる御てらの観音へまふでなにとぞ大慈の妙助にては、のあくぎやうとゞまりて仏門にいらせてたべとふしおがむ」(前編「五、美少年竊に母を諷む」の条、七一五頁)やうになつたのである。従つて、小まん(女)の男装は彼女の個性——男性的性質——からのみではなく、寧ろそれ以上に外的要素——母唐衣の悪行、唐衣の怒り、金兵衛・九助の言——が強く支配した結果であるから、それが意識的であることは謂ふまでもなく、而も姉弟取り替つての変装ではなくて一般的な男装である点、「とりかへ

ばや物語」の姫君（女）の男装とは異なつた性格を持つてゐるわけである。

しのぶ（男）の女装の性格も小まん（女）と略々同一であるが、生れた時以来既に女性として育てられてゐるから、彼に女性的な性質があつたとしてもそれは何等女装の原因となる筈がなく、却つて女装したまま成長したがためにさういふ性質になつたとも謂ひ得るであらう。従つて、後に「しのぶ」の名を「五郎八」と改め、小まん（女）と共に母横雲の仇庄兵衛の行方を尋ねて難波へ来る条に、

五郎八は近曾まで手弱女のすがたにて生長成しかば力もなみの男にはおよびず唐やまとの書はまなび得たれど剣術は熟せず

（後編「四、孝子難波に仇を報ふ」の条、七四四頁）

とあつても、このやうな女性的性質は女装故に生じた謂はば後天的のものとさへ云へるであらう。しかし、今まで雲井と呼ばれた彼が十七歳の時に「しのぶ」と改名する条に、彼は好うへつまはづれも又やさかたなりしかば近隣の人々まで実の処女なりとおもひ

（後編「一、行童剛を割て女を顕す」の条、七三〇頁）

とあるのを見ると、幾分先天的に女性的な男性であつたやうにも思はれる。何れにしても、彼の女装が、その女性的性質に有力な原因があるのでなく、従つて個性的なものではないとすれば、他に適切な理由を求めねばならない。

あつて、「とりかへばや物語」でもその変装あるが故に恋愛・密通事件が随所に見られ、読む者をして複雑怪奇の念を起さしめると共にその変装をさへ呪はしめるに至るほどである。しかるに、「奴の小まん」にあつては、変装が取扱はれたがために読解に混乱を来たさせるやうなこともないのみならず、その変装が原因となつて見苦しい不倫な關係や不慮の禍を招いたといふ箇処も全く見当らないくらいで、却つてその変装の役立つ場面さへ描かれてゐる点に特に注目しなければならぬ。即ち、宗景が時の幕府より逆心ありと認められ、身内の者はすべて誅戮される憂目を見るに至つた（前編「三、侍女暗に茶毒を知る」の条、七〇八頁）が、その時大根門東太に捕へられた雲井（男）は女装してゐたために危ふく難を免れたこと（前編「四、嬌婦迫て旅僧を殺す」の条、七二二頁）、或は、しのぶ（男）が小まん（女）に恋慕した時、浄欲寺の僧果田はしのぶ（男）の女装してゐることを知らずに、二人が単に女同志であると思ひ込んで別に意に介することもなかつたこと（後編「一、行童剛を割て女を顕す」の条、七三二頁）などがその例である。

かくの如く「奴の小まん」に於て作品中に男装・女装の二つが同時に取扱はれてゐることは、「とりかへばや物語」と等しい特色であるが、変装の性格に至つては必ずしも同一と見ることは出来ないわけである。

入江安濃次郎の側室横雲よりしのぶ（男）が生れた時には、既に正妻唐衣に小まん（女）があり、それが女性であつたために入江家の後を嗣がせる事は出来なかつたが、しのぶ（男）は男性であるから後嗣の資格があつた。しかるに、もし彼を男性として育てる時には、必ずや怨念深い唐衣の姦計が企てられるであらうことが危惧の種であり、かくして女装させられたわけである（前編「三、侍女暗に茶毒を知る」の条、七〇七頁。後編「五、暗夜に走て情死を留む」の条、七四八頁）。従つて、しのぶ（男）の女装は生れた当初から

でそこには殆ど個性的な影響はなく、やはり小まん（女）と同じく唐衣の姦計に対する防備といふ外的要素に支配されたものであるが、彼自身に何等の意志さへなかつたことは「とりかへばや物語」の場合と異なるところが無い。しかしながら、彼の女装もやはり一般的な女性に変装しただけで、「とりかへばや物語」の如く特定の人物間の「取り替り」が行はれたものではないのである。

尙、小まん（女）・しのぶ（男）の変装は両者が時間的に同時に行はれたのではなく、しのぶ（男）は生れた時、小まん（女）は十九歳の時であつたところにも、両物語の相違が認められる。

次に、これらの変装の影響について考へて見よう。変装は他人を欺き騙し、不慮の禍を招く源泉となり勝ちで

三

前述したやうに、「とりかへばや物語」の若君（男）、姫君（女）は異腹の兄妹であつて、幼少より略々同一環境の下に育成されたため、互によくそれを意識し終始兄妹としての愛情を發揮するが、その愛情たるや決して恋愛ではなく、単に人並ならぬ身体として成長したことを敷き慰め合ふところに生じたものである（『日本文学教室』昭和二十五年九月号所載、拙稿「とりかへばや物語」に現れた愛情——倫理的な愛情を中心として——参照）。従つて、この物語に恋愛描写があつても（後述する）、これら変装した男女間には恋愛や結婚は少しも描写されてゐない。

しかるに、「奴の小まん」の小まん（女）・しのぶ（男）は形式的の姉弟で実は全くの他人關係にあり、而も幼少の頃は別の生活環境にあつたため、浄欲寺で互に見初めた時にはまだ形式的の姉弟關係にあることさへも知らなかつた（後編「一、行童剛を割て女を顕す」の条、七三二頁）。従つて、そこに芽生えた愛情は所謂恋愛に他ならず、尙、血を分けた真の姉弟關係でないといふことが、二人を結婚へ導く有力な導火線となるのである（後編「五、暗夜に走て情死を留む」の条、七五三・七五四頁）。而も、その恋愛は単なる思慕に拠る動機からで、決して、変装に拠つて規定されたものではないのである（この物語には、二人の間以外にも恋愛描写がある

が、これについては後述する。

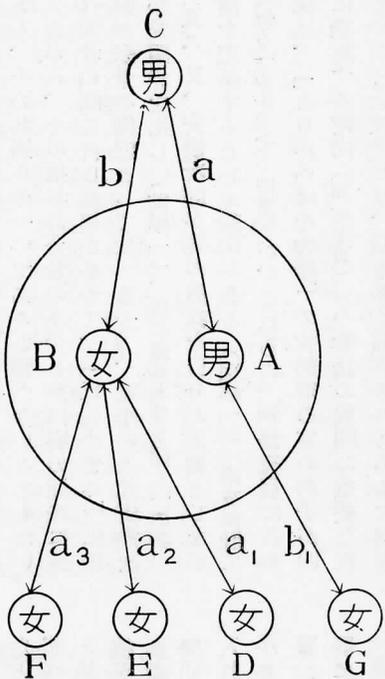
次に、「とりかへばや物語」の二人の間の関係が恋愛でないとするれば、それは謂ふまでもなく兄妹としての愛情に他ならない。而も二人にあつては変装が一種の悲劇とも謂ふべきもので、それに対する互の悲歎と慰藉とに拠つて益々深まつた兄妹愛であるから、この場合の愛情即ち兄妹愛は変装に拠つて規定されたものと謂ふことが出来る。

これに対し、「奴の小まん」で、しのぶ(男)の母横雲の仇である庄兵衛をしのぶ(男)・小まん(女)の二人が共に尋ねるところ(後編「四、孝子難波に仇を報ふ」の条、七四四頁)は、假令形式的であるとは謂へ、二人が姉弟関係にある以上やはり姉弟愛の発露であると謂ひ得るが、これは別に変装が齎した結果でもない。尤も、この場合の愛情は見方に拠つては恋愛とも考へられようが、何れにしても変装に拠つて規定されたものではないと謂ふことが出来るであらう。

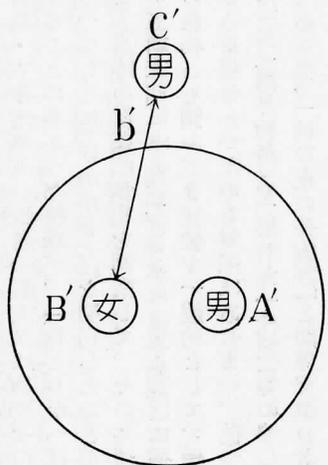
以上を要約すれば、

- (一) 変装した男女間の恋愛
- (1) 「とりかへばや物語」では全然見られない。
- (2) 「奴の小まん」では変装そのものに規定されない。
- (二) 変装した男女間の、恋愛以外の愛情
- (1) 「とりかへばや物語」では変装そのものに規定さ

とりかへばや物語



奴の小まん



(2) 「奴の小まん」では変装そのものに規定されない。となるが、このやうに、両物語には変装した男女間の愛情描写があつても変装との関係は自ら異なつてゐることがわかるのである。

序でに、変装男女の何れかの、第三者に対する愛情についても言及して置かう。

次に於て、「とりかへばや物語」の式部卿の宮の御子(男) C (宰相中将・「中納言」の名で物語中に長期に亘つて見えてゐる)と、女装した若君(男) A との間に恋愛関係(式部卿の宮の御子にとつては、女装した若君は実は男性であつても女性として見られてゐるから、敢へて「同性愛」と呼ばないことにする) a が生じ(四七七頁)、又、男装の姫君(女) B を中心とする恋愛関係 a₁・a₂・a₃は、正妻として結婚した四の君(女) D・麗景殿女御の妹(女) E・吉野の宮の姫君達(女) F との間に生ずる(四七九・四八七・五一七頁)など、変装男女の夫々に恋愛関係を起さしめてゐるに反し、「奴の小まん」では、小まん(女)・しのぶ(男)が共に親に似合はぬ貞節なためか、その何れにも第三者との恋愛関係が描かれてゐない。

ところで、「奴の小まん」に於て浄徳寺の僧果円(男)C'が男装した小まん(女)B'に恋慕すること(後編「一、行童剛

を割て女を顕す」の条、七二九頁) b'は、「とりかへばや物語」の式部卿の宮の御子(男)Cが、男装して侍従となつた姫君(女)Bに懸想すること(四八四頁) b'と同じやうな男性の同性愛的関係(果円にとつては、男装した小まんは男性として見られてをり、又、式部卿の宮の御子にとつては、男装した姫君は男性として見られてゐるから、小まん・姫君は共に実の女性であつても夫々二人の関係は純粹の恋愛即ち異性間の恋愛ではなく、従つてここには「男性の同性愛」として記す)にあり、この点両物語は極めてよく類似してゐる。

尚、この他、「とりかへばや物語」には、朱雀院がまだ帝として御在位の代、女装したまま侍となつた若君(男) A と、時の春宮女一の宮(女) G との間に生じた女性の同性愛的関係(実はこの関係こそ眞の恋愛関係かも知れないが、若君は女装してゐるため女性として見做されてをり、ここには女性同志の「同性愛的関係」として記す) b₁が描かれてゐる(四八六頁)。従つて、両物語に変装男女の何れかに於ける同性愛的関係が描かれてゐるとしても、両物語が全く一致するのは男性の同性愛的関係にある b・b'に於てのみであり、

りかへばや物語」にある女性の同性愛的関係 b_1 に対する関係は「奴の小まん」では見られない。又、「とりかへばや物語」でbの關係に拠つて姫君(女)Bと式部卿の宮の御子(男)Cとの密通懷妊事件の起る趣向は、假令「奴の小まん」にb'の關係があるにせよ、小まん(女)B'と果田(男)C'の間にはさういふ事件は起つてゐないのであるから、両物語に稍々相違点もあるわけである(因みに、「とりかへばや物語」の b_1 の關係に於ても女一の宮Gと若君Aとの間に密通懷妊事件が見られる)。

最後に、両物語中には変装男女に關係なき愛情描写のあつても、その共通点の一つであると謂へないこともない。しかしながら、その描写の分量の多少とか内容の深淺に至つては兩者の間に自ら差異があつて、「奴の小まん」に於て唐衣が宗景の側室として仕へる一方、家来の入江安濃次郎と恋愛關係を生じ(前編「一、楼に靈狐和琴を聞く」の条、六九六頁)、又、安濃次郎が遂に唐衣を自分の正妻としながら横雲を恋慕するといふ趣向がある(前編「二、雨夜に計て私夫を斬る」の条、七〇四頁)が、これらの、物語發展に占める地位は、「とりかへばや物語」の式部卿の宮の御子が四の君に懸想する趣向(四七七頁)の、物語の展開に重要な役割を果すのと比較すれば、頗る軽く描写されてゐるに過ぎないのである。

四

江戸時代の文化文政期は武士階級が腐敗墮落してその町人化・女性化は頂点に達し、享楽淫蕩の風潮は大名・幕府にも浸潤したが、その時に當つて發刊された(文化四年——西紀一八〇七年——)のが「奴の小まん」である。恰も「とりかへばや物語」が王朝貴族の衰微頹廢した中に現れた如く、「奴の小まん」も亦かかる時代の影響を幾分でも蒙つたと謂へないこともないだらうが、後に「源氏物語」を翻案して「修紫田舎源氏」を書き、その他「心中天網島」に拠つた「桔梗辻千種之衫」、「心中宵庚申」を翻案した「新うつほ物語」、「国姓爺合戦」を原拠とした「唐人髻今国姓爺」など古典・古浄瑠璃及び狂言の翻案又は綯交ぜの短篇物を著作することの多かつた種彦が、「新とりかへばや物語」と銘うつてここに「奴の小まん」を發刊したことを考へると、彼がよく当時の淫蕩的世相を洞察して、その共通した時代を遙か王朝末期に求め、「とりかへばや物語」に描かれた頹廢期の産物とも謂ふべき変装を一趣向として、作品に取り入れざるを得なかつたのも無理はあるまい。従つて、「奴の小まん」が「雨月物語」や「梅若丸一代記」等の著しい影響を蒙つてゐる他、「秋の夜の長物語」と關係交渉のあることは、既に後藤丹治先生も指摘してをられる(「中世国文学研究」八六頁)が、以上の如く、「とりかへばや物語」も亦尠からず影響を与へた一先行文学作品と謂ふことが出来ると思ふのである。(昭和二三・八・八稿、昭和二九・五・九補訂)

近世説美少年録の一考察

— 作風と原拠について —

山 川 一 安

曲亭馬琴の読本に近世説美少年録といふのがある。この作品は文政十一年に第一輯を刊行し、天保五年第四輯迄出して一時筆を止めたが、その後弘化二年、新局玉石童子訓といふ標題で稿を継いだ、しかし弘化四年、第六十回に至つて中絶してしまつた。

この作品は、あまり傑作であるとはいへないが、興味ある問題を含んでゐるのである。それは何かといふに、作風の問題である、従来この作品に關してよくいはれる事は、前半の作風と後半のそれとの間に著しい差異があり、殊に前半の趣向や叙述の有様などは、馬琴の読本としては全く異例に属する、といふ事である、すなはち前半の主人公は不良少年ともいふべき人物であり、又そのいくつかの場面は極めて淫蕩な描写が為されてゐる事などは、他の馬琴の

作品に見る徹底した道德思想を知る読者から見れば奇異の感を抱かずには居られないのである。

しかもこれが後半に入るとその作風は一変して勸善懲惡的なものになつてゐる。なほ私が不審に感ずるもう一つの事は、第五十回の少し前あたりから第六十回の中絶した箇所迄は、あたかも独立した別箇の物語の如き感がある事である。前半の主人公朱之介は退場して代りに二人の美少年が登場する上に、義士たちつどつて不仁の領主を討ち、さうして一応の大団円を見てゐるのであつて、何としても前半の筋書に關係なく別の物語を持来つてつないだ様な感がある事を否めないのである。

この様ないくつかの疑問のうち、前半の作風については麻生磯次博士の研究に依つて、中世小説「櫛杭間評全伝」を原拠としたためである事が明らかにされて居り、私がこ